

## 上代におけるエ列乙類の性格

森山, 隆  
九州大学助手

<https://doi.org/10.15017/12346>

---

出版情報 : 語文研究. 8, pp.21-29, 1959-02-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 上代におけるエ列乙類の性格

森 山 隆

一、

奈良時代末期より平安時代初期にかけて、漸次その中舌的要素を失ひ、甲類エ列音に吸収されたと推定されてゐる乙類エ列音は、古代日本語における特徴的な母音調和の現象に、直接關係しなかつたために、イ列乙類と共にその性格は未だ明確にされてゐないと思はれる。また、オ列乙類と違つて、エ列乙類はエ列甲類やイ列乙類と同じく、それ自身結合して結合単位をつくることが皆無と思はれることから、古代日本語における本来的な母音でなく、なんらかの音変化の結果生じた母音であるとの見解も有力である。右の見解は、上代日本語に見える少数の事例を根拠として主張されてはゐるが、必ずしもすべてのエ列乙類イ列乙類の説明に十分であるとは思はれない。したがつて、音価の推定はともかく、右の推定や説明を十分に確認する上にも、上代語におけるエ列乙類イ列乙類の性格を、基礎的な面において再確認する必要があると思はれる。なほ、イ列乙類に関しては、すでに福永静哉氏に論があり、<sup>(註一)</sup>ここでは主としてエ列乙類を取りあげることとする。

二、

泉井久之助博士はその「上代日本語における母音組織と母音交替」<sup>(註二)</sup>の中で、エ列乙類が上代語の音韻組織の中に占める位置を、次のやうに御説明になつた。

1.  $\text{a}$  は領域 A の非口蓋の後部母音  $\text{o} \cdot \text{u} \cdot \text{i}$  と確實な単位において結合することが少ない。
2.  $\text{e}$  は  $\text{a} \cdot \text{i}$  のそれぞれと結合がある。
3. しかし領域 A の内部は原則として後母音の非口蓋的領域である。
4.  $\text{e}$  のすべてが  $\text{ai}$  から来たとは考えられない。しかし  $\text{ai}$  から来たものをもふくむことは、 $\text{e}$  がほとんど  $\text{e}$  として  $\text{e}$  より広い口蓋的母音であつたことを示すと思はれる。  
しかし  $\text{e}$  は  $\text{a} \cdot \text{e} \cdot \text{i}$  と同様に非円唇的である。

右は上代語に見えるエ列乙類の結合事例を基として引き出された結論であるが、右の基本線を確認するために、以下事例をあげて検討を試みることにする。(以下、甲乙兩類の区別のある音節は、慣例

により、乙類に平がなを宛てて表記する)

エ列乙類が最も多くの結合例をもつのは、ア列音との結合であつて、

(1) タけ(竹)タけ(嶽)カげ(蔭)ハタけ(曠)サけ(酒)サけ(鮭)ササげ(荳角)ヒカげ(羅)タへ(樗)ハへ(蠅)アめ(天)アめ(雨)アめ(飴)カめ(亀)マめ(豆)サめ(鮫)マけ(嘆)のやうに、かなり安定した語彙によつて構成されてゐる。しかしながら、かつて有坂秀世博士が指摘されたやうに、タけ(竹)、カげ(影)、サけ(酒)、アめ(天、雨)はそれぞれエ列乙類(も)とア列(a)との交替形として、タカ<sub>II</sub>、カガ<sub>II</sub>、サカ<sub>II</sub>、アマ<sub>II</sub>、のいはゆる被覆形をもつので、このことから逆に、エ列乙類は語幹末尾音の変質、変化によつて生じ、しかも母音調和とは無関係に、寧ろ母音調和を部分的に破壊したところの音韻変化によつて発生した<sup>(註三)</sup>と説かれる。エ列乙類の発生が起源的にそのやうなものであるか、語幹末尾音の変化の場合のみにとゞまるものであるか、またすべてのエ列乙類の発生を説明できるものであるか、現在のところ分明でない。しかしながら、少くとも上代日本語の音韻体系の中に、安定した位置を占めてゐたことは推測できる。

次にイ列音との結合において、

(2) イけ(池)イめ(夢)ニへ(菴萱)へミ(蛇)シゲ<sub>II</sub>シ(繁)の少数例の他には、複合語と思はれるヒげ(鬚)、地名けヒ、ニへ、さらに動詞出自と思はれるシめ(標)等の事例があるのみで、ア列音との結合事例ほどの多数例を見出すことはできない。泉井博士はその理由として、資料の範囲がせまく限られてゐること、また

もがその結合単位の大部分において、すでに早くeと合一あるいはeに吸収せられてゐたため、と推測されて居られる<sup>(註四)</sup>。

ウ列音との結合例は、

(3) スげ(誓)ツめ(爪)ウべ(諾)のやうに母音交替をしてスガ<sub>II</sub>、ツマリ、の形をもつ語、複合語と思はれるウへ(上)、スズめ(雀)、ウけ(覆槽)、動詞からの転成語ツめ(集衆)、地名けツ、人名クめ、接尾辭的ウルけ<sub>II</sub>ヰ(巖駁鉤)、エ列乙類が語頭に立つげヅ<sub>II</sub>ル(梳)、めゲ<sub>II</sub>ル(廻)、めヅ<sub>II</sub>ラ<sub>II</sub>シ(珍)などの語彙がある。

また、上代語において、すでに甲乙兩類の区別が無くなつてゐたと見られるエセゼテデネエレエの各音節の中で、フネ(舟)、ムネ(胸)、ウレ(末)、ムレ(群)クレ(暗)等の各語は、それぞれ交替形としてフナ<sub>II</sub>、ムナ<sub>II</sub>、ウラ<sub>II</sub>、ムラ<sub>II</sub>、クラ<sub>II</sub>、の被覆形が存在し、これらのエ列音は乙類相当と見られるので、上代語に前接する古代日本語のある時期において、エ列乙類はウ列音と基本的結合をもつてゐたと推定される。したがつて、泉井博士が<sup>(註五)</sup>の性格を、上代日本語において、領域Aの非口蓋の後部母音o・u・iと確實な単位において結合することが少ない、とされたのは、uとの結合に関する限り再検討の余地があると思はれる。エ列乙類とウ列との結合は、エ列乙類とイ列甲類との結合事例に比しても遜色はないのである。

以上がエ列乙類の基本的性格を示す結合例であつて、他のオ列甲、オ列乙、エ列甲、イ列乙の各音節と結合した事例はほとんど見出すことができない。また、イ列甲類との結合例が少ない理由が、

泉井博士の御説明のやうに、はたしてeがeと合一、あるいはeに吸収されたためであるか検討の余地があらう。そのためにはエ列甲類の結合状態を調査する必要がある。

### 三、

エ列甲類の結合に関する特徴は、エ列乙類ほどの結合事例が見出せないといふことである。このことは、イ列甲類がイ列乙類に比して遜色ない結合関係と結合事例をもつ事実と、甚だしく相違する点である。たしかにエ列甲類は、奈良末期から平安初期にかけて、エ列乙類を吸収したかに見えるが、上代日本語およびそれ以前の時代において、エ列乙類より優勢かつ安定したものであつたかかなり疑はしい。上代日本語においては、各音節ともア列と最も結合し、一語を構成する事例が多いが、エ列甲類は確実な結合単位としては次の数例があるのみである。

- (1) カケ(雞) マヘ(前) アヤメ(草の名) ケヤ||ニ(副詞) タケ||ソカ||ニ(副詞) タケ||シ(猛) cf. ヘラ(坂の名) (ヘキ(姓))

右の事例の中でカケ(雞)は擬音語的性格をもち、マヘ(前)はマ||への複合と見られるので、エ列乙類とア列との結合事例ほどの、安定した普通名詞二音節語が見られない。カヘ(壁)、ケタ(柵)ヘラ(籠)、のべ、ケ、への甲乙が不明なので、これらをエ列甲の事例に加へたとしても、なほ少数例にとゞまる。

イ列との結合例は

(2) イヘ(家)

の他にはミヘ(地名)メヒ(川名)の個有名詞を挙げねばならぬほど事例に乏しい。これはウ列との結合においても同様であり、

(3) スベ(術) スメ|| (皇) メゲ||ム(恵)

の他にはヘグリ(平群)、ミヌメ(敏馬)の地名や、複合語と思はれるケフ(今日)などに過ぎず、またスベ(術)もおそらく複合語であらう。

右のアイウの三音節以外の、つまりオ列甲乙両類、エ列甲乙両類との結合例も、非常に乏しいことは、エ列乙類の場合と同様である。すなはち、エ列甲類は、先述のやうに僅少の語例をもつてア列イ列ウ列と結合したかに見える、他方、エ列オ列とは結合単位を構成しなかつたと思はれる。そしてまた、エ列乙類に比較して、エ列乙類に匹敵する事例数をもたないといふことは、両者の関係を考察する上において、極めて重要なことであると思はれる。

しかしながら、また次のやうなことにも留意しなければならぬ。それは、エ列甲類は一音節語において、エ列乙類と対応して、次の語彙が存在することである。

a エ列甲 ケ(異) ヘ(辺) メ(女)

b エ列乙 け(毛、筒、氣) ヘ(船、巻) め(目、芽、海藻)

これらの一音節語が、一定の意味と対応して存在するといふことは、上代語において、エ列甲乙両類がかなり安定した存在であつたこと、それはエ列甲乙両類が、上代を溯る、ほど遠からぬ時期に、語幹末尾音の変質や、母音の合成によつてのみ生じたものでないこと

とを暗示する。一音節語で交替形をもつ、め(目)ーま(馬)ナコ(眼)などの存在は、エ列乙類の發生を語幹末のみに限ることを拒否するであらうし、單に母音の合成によつてi(イ)、e(エ)、o(オ)、u(ウ)の轉化を主張するには、エ列甲乙兩類のすべての場合を説明することは不可能である。

なほ、エ列甲類の現はれる位置は、

## (1) 語頭に

ケヤ(ニ) (副詞) メケ(ム) (意) メ(ス) (召) ケ(ス) (着) ケ  
 Ⅱフ(今日) ヘダ(ツ) (隔) ヘナ(ル) ヘダ(リ) (地名) メヒ  
 (川名) 等

## (2) 語中に

ウケ(ラ) (花名) タケ(ソ) カ(ニ) (副詞) クル(ベ) キ ウラ(メ) Ⅱシ  
 キス(メ) Ⅱル サバ(メ) Ⅱク ハシ(ケ) Ⅱヤシ シメ(Ⅱ) ス カ(ヘ) Ⅱル  
 カ(ヘ) Ⅱス サケ(Ⅱ) プ  
 タケ(Ⅱ) プ カナ(シ) ケ(Ⅱ) ク等のク語法の場合、等

## (3) 語尾に

マ(ヘ) (前) イ(ヘ) (家) ヒメ(姫) ミメ(島名) カケ(雞) イ  
 フリ(サ) ヘ(地名) スベ(術) カケ(地名) アヤメ(草名)  
 のやうに、何れの位置にも立ち得るが、動詞の活用語尾としては、  
 四段活用の命令形語尾として現はれ、エ列乙類が動詞の基本形と考  
 えられる連用形語尾にも現はれることと、少しく趣を異にする。上  
 代語における動詞連用形語尾拼音は、

i (甲) 四段、上一段、i (乙) 上三段、上一段、e (乙) 下二  
 段、

e (甲?) 下二段 (甲乙兩類の区別のない音節の下二段活)

の四種であるが、上二段活に見(甲)るー (乙)るの両形があり、  
 他の上一段活はすべてi (甲)であるところから類推すれば、下二  
 段e (乙)も、かつてはe (甲)と対立し、e (甲)を假収統一した  
 時期があつたかも知れない。しかしながら、その痕跡を檢出する  
 のは、かなり困難なことであると思はれる。

エ列甲類と比較の便宜上、エ列乙類の現はれる位置を示せば、

## (1) 語頭に

ヘミ(蛇) ヘ(ツ) (絲麻) ヘ(そ) (騎) け(タ) (地名) け(ツ) (地名)  
 け(ダ) シ(蓋シ) け(Ⅱ) ツ(消) け(ヅ) Ⅱル(梳) め(Ⅱ) ツ(愛) め(ヅ)  
 ラ(Ⅱ) シ(珍) め(グ) Ⅱル(廻) け(ブ) リ(煙) 等

## (2) 語中に

ヒメ(カ) プ(ラ) シ(げ) Ⅱ(シ) ウ(け) Ⅱ(フ) カ(げ) Ⅱ(ル) ア(へ) Ⅱ(グ) ナ(げ)  
 Ⅱ(ク) シ(げ) Ⅱ(ル) ハ(ル) け(Ⅱ) シ(などのーカ(副詞形)との交替  
 形をもつ形容詞語幹)

## (3) 語尾に

カ(げ) (藍) カ(げ) (蘿) タ(げ) (竹) タ(げ) (隸) け(け) (酒) サ(げ)  
 (鮭) ハ(タ) け(畑) タ(へ) (ア) め(天) ア(め) (雨) ア(め)  
 (飴) マ(め) (豆) カ(め) (龜) サ(め) (鮫) サ(サ) げ(壹角) ハ(へ)  
 (蠅) イ(め) (夢) ス(げ) (菅) ツ(め) (爪)  
 のやうに、語の各位置に現はれることはエ列甲類の場合と同様で  
 ある。

上代語において、甲乙兩類の明瞭に書き分けられてゐるケゲヘベ  
 メ各音節の性格は右の通りであるが、すでに甲乙兩類の区別が消滅  
 してゐたと思はれるエセゼデネエレエの各音節の性格についても

触れなければならない。それは、これら書き分けの無い音節は、ほぼエ列甲類の方に吸収統一されたと推定されるために、結合事例においてすべて甲類相当と見做される場合、前述の明瞭に区別対立のあるケゲへベメ甲類とけげへべめ乙類との均衡関係に、いくぶんかの歪を与へうる余地があるためである。むしろ、上代語としての音韻図式が、甲類エケゲセテデネへベメエ列乙類けげへべめであることからすれば、右の操作、すなはち書き分けの無い音節を、すべてエ列甲類として取扱ふことは正当であるかも知れぬ。しかし、書き分けの無い音節の中に、かつてエ列乙相当であると推定されうる語を含むことは、エ列甲乙両類の上代語に至る過程の性格を考察する場合に、特に考慮しなければならぬことである。それはエ列乙類の性格を、上代語にわづかに残存する、けげへべめ音節の場合のみから決定するか、それとも可能性をもつ推定のもとに、かつてのエ列乙類の性格が、いかに上代におけるエ列乙類の性格に変貌してきたかを考察するかの相違である。私はむしろ後者の立場を重視したく思ふ。それは、かつてのエ列乙類、エ列甲類の再構こそ、それに引続く上代におけるエ列甲乙両類の特徴を、より明確に位置づけることができるかと想定するからである。

#### 四、

エセゼテデネエ列エの各音節が、ア列音と結合して語根(幹)を構成する事例は、次の通りである。

- (1) a アラレ(蔽) アハレ(柯枿) ハダレ エラエラ(副詞)

タデ(藜)

b ワセ(早稻) カゼ(風) タテ(楯) タネ(種) カネ(金)

サネ(核) マレ(稀)

a の事例はエ列乙類相当と推定のつかぬものを便宜集めたが、b の事例はそれぞれ熟合形(被覆形)として、ア列音との交替形ワサリ、カザリ、タタリ、タナリ、カナリ、サナリ、マラリをもつので、この現象は甲乙両類の書き分けのあるケゲへベメの音節では、常に乙類けげへべめであるので、書き分けの無い音節の場合もエ列乙類相当と思はれる。右の a b の事例を比較して見ると、二音節普通名詞においては、b の事例が豊富であることは明瞭である。つまり、エ列乙類と目されない音節は、基本的な普通名詞二音節語をア列音と共に構成する例は極めて稀なのである。

次にイ列音との結合事例は、

- (2) a キネ(杵) ヒエ(稗) ニレ(楡) セリ(芹) ヒレ(領巾)

エビ(菜名)

b イネ(稻) シネ(稻)

キネ(杵)は複合語と思はれるが、a の他の事例にラ行との結合が多いのは特徴的である。泉井博士は、上代語において e と i との結合事例が少数であることを、1) 資料の範囲が限られてゐること、2) すでにも e が e に吸収合一されてゐたこと、の二つをその理由とされたが、1) は二音節普通名詞においては、ほとんど現存の上代の用例を補足できる組合せが考へられないので、もつぱら第二の理由が重要視されてくる。e が e に吸収合一されたといふ見方が、単に b 項に挙げた、かつてエ列乙類相当のものが、上代において e 相当にな

つたといふ意味でなら、その事例はあまりに少数なので、iとeとの結合事例が少ない理由になり難い。もし博士の推定を支へうるものがあるとするなら、それはa項の事例をも含めて、かつてeであったものがeとなつた、としなければ、iとeとの多数の結合事例をもつことができない。もし、この仮定を認めるとするなら、次の二点において重要な意味をもつであらう。一つは、エ列甲類はかつてエ列乙類を吸収統一しつゝ形成されたといふこと。この場合、上代語に均衡して残存するケゲヘベメ甲類向けへべめ乙類を比較すると、エ列乙類を含む語彙が、エ列甲類を含む語彙より多く、書き分けの無い音節においても、乙類相当のb項事例は甲類相当のa項事例より多数であるので、上代以前にもeの吸収統一が行はれたとすると、本来的にeであつた音節を含む語彙は、ほとんど存在しなかつたか、または極めて僅少であつたと思はれる。逆にいへば、上代以前のある時期において、エ列乙類はエ列甲類に比して圧倒的に優勢であり、多数の語彙を擁して、音韻体系の中に基本的位置を占めてゐたことと思はれる。第二に、右の仮設の中においても、やはりエ列乙類はウ列音と結合する傾向をもたず、イ列音がより優勢な結合關係にあつたであらうか。この二点が同時に満足できれば、泉井博士のエ列乙類に關するお説は決定的なものとなるであらう。

- 上代語において、甲乙兩類の書き分けのないエセゼテデネエレエ各音節と、ウ列音との結合した事例は次の通りである。
- (3) a スネ(髓) ツネ(常) ヌエ(鳥名) スエ(末) ユエ  
 (故) エグ(植物名) フェ(笛)
- b フネ(舟) ムレ(群) ウレ(末) ムネ(胸) クレ(暗)

右の事例数はイ列音との結合事例に比して、いささかの遜色もなく、特に本来エ列乙類相当と考へられるb項の事例数は、はるかにイ列との場合を凌駕し、ア列との結合事例に匹敵するので、エ列乙類相当が本来的に結合するのはア列およびウ列であり、イ列はそれに比べてやゝ事例数に劣るといふことができる。したがつて、泉井博士が

- 1) eとiとの結合事例が少ないのは、すでに早くeと合一、あるいはeに吸収されたため  
 2) eはo・u・iと確実な単位において結合することが少ない。またa iのそれぞれと結合がある。

とされたのは、iおよびuとの結合を中心として考へるとき、1)と2)は同時に成立しないことが明瞭である。1)を成立させるためには、2)の行文をa・u・iのそれぞれと結合がある、としなければならぬし、2)を成立させるためには1)は不確かな推定である。

最後にオ列音との結合について見ると、泉井博士のお挙げになつた事例は

- e-i-ō こめ(米) こけ(苔)  
 e-i-o ソテ(袖)  
 e-i-ō こエ(声) ネもころニ(懸懸) ヲ||そネ(小確) イツ||とセ(年) シケ||シ(醜) こセ(地名)

などで、e-i-ōの結合例が少ないのは、eが早くeに吸収せられたため、と推定される。右の外になほ上代において存在したと思はれる語は、

ヨネ(米) ホネ(骨) モケ(木瓜) ネコ(猫) メト(薺、植物名)

などの語で、ヨネ(米)はヨナII(ムシ)といふ熟合形をもつので、コエ(コワII)と共に、そのエ列音は、かつては乙類相当と推定される。ネコ(猫)のコは新撰字鏡に甲類表記で見えるので、かつて甲類であつたことは動かせないとしても、ネの甲類相当は現在のところ推定不可能である。ソテ(袖)は、もちろん複合語の性格が強いので、e-i-oの甲類同士の確実な結合事例は見当らないやうである。また、o(乙)ーe(甲)の事例も、eの甲類相当の明白な事例が無いので、ä-i-ö, ä-i-o, e-i-ö, e-i-o, の四通りの組合せの中で、かつて確実に存在したと思はれるのはä-i-öがまつ挙げられてよいだらう。

### 五、

エ列乙類はエ列甲類と同じく、それ自身結合して、ä-i-ä, e-i-eの如き結合単位をもつことなく、また上代において母音連接の回避によつて生じたと思はれる a'V'e (N)ia'Ve (田)の転化現象があるので、日本語における本来的な母音では有り得ない、との大野晋氏の見方がある。また、エ列乙類の発生はイ列乙類と同じく、原始日本語の内部で起つた音韻変化―すなはち母音間の子音の脱落の結果発達したものである、との亀井孝氏の見方もある。これらはずべて、日本語の成立当初、エ列乙類は存在しなかつたといふ立場であるが、この見解の背後には日本語はその成立の当初、上代

日本語に見られる母音調和の法則が、より完全な形で生きてゐた筈で、エ列乙類およびイ列乙類は母音調和の法則とは無関係に、むしろ母音調和を部分的に破壊した音韻変化によつて発生した、とする見通しに立つものと思はれる。大野晋氏の御説明では、母音調和に關係し、結合単位を構成する母音のみが、日本語の本来的な母音であるとき、<sup>(註八)</sup> 再構成された動詞活用<sup>(註九)</sup>の起源について見ると、下二段活用連用形<sup>(註十)</sup>の成立は、

(遷へ) äke / aka-i

といふ形が示されてゐる。すなはち e (乙) は母音連接の法則 a'Ve (N) によつて ai なる形に還元でき、連用形は語幹に i なる接辞が付くことによつて成立するといふ統一的解释を主張されたが、この解釈を下二段活用動詞の全般におよぼすと、いささか不都合な点を生じるやうである。問題は語幹にオ列乙類をもつこム(籠)、そク(除)、そム(染、始)、とク(解)などの語である。これらの語の連用形の再構は、

(籠て) kömë / köma-i

(穿へ) ökö / öka-i

(穿て、穿つ) somë / söma-i

(遷へ) töke / töka-i

とでもなるのであらうが、再構された動詞語幹(基)は、ö-a といふ音節結合の法則に反する結合が推定されるのである。これは母音調和や音節結合の法則が、より完全な形を保つてゐたと仮定される、成立当初の日本語動詞の語幹(基)としては、ふさはしくない結合であると思はれる。上代において下二段活用をとる動詞の、連



用形活用語尾直前の音は、ア列ウ列に次いでオ列乙類である動詞が多いので、右の推定は動詞連用形の形成が、比較的新しい時期に成立したと仮定しなければ、肯ひ難い結合関係である。

亀井孝氏の御説明にも見られるやうに、*o* をなんらかの形で *ai* といふ母音連接より導かうとする試みは、次の事例をその根拠に踏まへてゐる。

△高市  $\searrow$  takaitu  $\rightarrow$  takehi

△歎  $\searrow$  nagaike  $\rightarrow$  nageki

従来この変化は *ai*  $\searrow$  *e* (乙) の証として引かれるが、*a* は *i* の後接によらぬ場合にも *e* に変化することは考へられるのであつて、すべての *o* が *e* から転化したとするのは、右の二例の現象の解釈を、やゝ拡張し過ぎた嫌ひがあると思はれる。たとへば正倉院文書に見える△長押  $\searrow$  の語は△ナげ (乙)  $\searrow$  であつたと思はれるが、必ずしも△ナガ  $\searrow$  イシ  $\searrow$  に遡りうるとは思はれない。

同様のことはエ列甲類の場合にも考へられる。エ列甲類は先に述べたやうに、基本的な語彙に含まれる例に乏しく、連母音 *ai*  $\searrow$  *e* (乙) の説明には、主として語法の問題に触れることが多い。

ウ語法 (憂ヶク)  $\searrow$  ukaku  $\searrow$  ukeku (アクの後接)

助動詞「リ」(咲ケリ)  $\searrow$  sakari  $\searrow$  sakeri (ナリの後接)

右の仮設では一語の語頭や語尾に現はれる場合の説明が困難であらう。

カハツ  $\searrow$  kafu+rdu  $\searrow$  kafadu ia  $\searrow$  a

カハル  $\searrow$  kafu+ada  $\searrow$  kafuru ia  $\searrow$  e (甲) (註+)

カハツとカハルとを同一語源から説く右の説明は、カハルのへが確

実に  $\searrow$  (甲) である場合、有効な仮設であるが、 $\searrow$  (甲) キ (甲) を八日置  $\searrow$  と表記する事例は、訓仮名表記のもつ色々の含みはあるとしても、*ai*  $\searrow$  *e* (甲) を単純に應用したとは思はれない。

したがつて、上代に見られる *ai*  $\searrow$  *e* (乙) 、*ai*  $\searrow$  *e* (甲) の現象を、直ちに  $\searrow$  (乙) および  $\searrow$  (甲) の発生過程にまで結びつけることは、それらの一部の説明理由にならなくても、そのやうな過程によつてのみ成立したと考へるところに飛躍があるやうである。ク語法や助動詞「リ」の成立は、各種活用型活用形の成立以後の現象であり、四段活動詞命令形の成立はそれ以前と思はれるので、かりにク語法や助動詞「リ」の説明に *ai*  $\searrow$  *e* (甲) を適用することが妥当であるとしても、 $\searrow$  (甲) の派生の根本的条件を示してゐるとは思はれない。たゞ  $\searrow$  (甲) は *ia* の母音連接から起こることもありえたかも知れないと推測できるだけで、より成立の古い、名詞に含まれた  $\searrow$  (甲) を考察することが必要であると思はれる。連母音 *ai* は基本的方向としては  $\searrow$  *a* の現象が存在するので、 $\searrow$  *e* (甲) への変化は、すでに音韻体系の中に定位置を占めてゐた、 $\searrow$  *e* (乙) に対応する  $\searrow$  (甲) に牽引されて生じたとも考へられるのである。

### 六、

以上の各節において考察したエ列乙類の性格について、結論めいたことを記せば、次のやうになるであらう。

- 1. エ列乙類はエ列甲類とともに、上代日本語に前接する古代日

本語の音韻体系中にすでに存在してゐた。

2. その際、エ列乙類はエ列甲類に比して、二音節普通名詞の語彙において圧倒的に優勢であり、上代日本語への過程において徐々にe↓eの傾向を見せはじめた。

3. 右の傾向を逆推すれば、eのあるものはeから派生したことが考へられる。そしてまた、すべてのeがaiから、すべてのeがiaから生じたことは考へられない。

4. eは古代日本語において、a・u・iおよび少数のoと結合例をもつことは確実である。

(註一) 「先行音節の母音よりするイ列乙類の性格」女子大國文第四号(昭31・7)

(註二) 京都大学文学部五十周年記念論集所収

(註三) 國語音韻史の研究増補新版所収「古代日本語に於ける音節結合の法則」116頁

(註四) 註二書一〇〇一頁

(註五) 有坂秀世博士「新撰字鏡に於けるコの仮名の用法」(國語音韻史の研究増補新版所収)

(註六) 万葉集大成6言語篇所収「万葉時代の音韻」112頁と113頁

(註七) 「太古の日本語とシナ語」28と29頁脚註58

國語学辞典48頁「原始日本語」の項

(註八) 註六書18頁

(註九) 拙稿「上代における連母音aiの転化について」(國語学28輯)

(註一〇) 亀井孝氏「ツル」と「イト」(國語学16輯) 17頁

(註一一) 村山七郎氏は、カヘルのへが甲である証として万十四和可加敏流氏を引用されたが、(國語学20輯「亀井孝ソルとイトを讀みて」125頁)紙面の都合で理由を付されて居られないが、卷十四のエ甲表記は、中央語のエ甲にすべて対応するといふものではない。したがつて、へ甲を主張されるには一応説明される必要がある、と思はれる。

森山 隆編

古事記漢字索引(歌語訓注篇)

プリント一六四頁 頒価三百円 送料三十二円

右御希望の方は殘部少々ございますので、研究室森山宛お申し込み下さい。